

松 山 大 学 論 集
第 28 卷 第 4 号 抜 刷
2 0 1 6 年 10 月 発 行

新田帶革製造所創業地周辺の歴史地理

山 内 譲

研究ノート

新田帯革製造所創業地周辺の歴史地理

山 内 譲

は じ め に

本稿は、新田長次郎研究の一環として、新田帯革製造所創業地の立地条件や周辺の景観について歴史地理的側面から考察を加えてみようとするものである。

長次郎が明治18年（1885）3月に新田帯革製造所（以下、新田帯革と略称することがある）の前身にあたる工場を開いたのは、当時的大阪府西成郡難波村の一角であった。この地は現在の大阪市浪速区久保吉二丁目に当たり、すぐ東隣を南海電鉄汐見橋線やJR環状線、阪神高速15号線が走り、西北方約1.2kmのところには京セラドーム球場が位置するなど、大阪市南西部の市街地の一部となっているが、創業当時の景観はこれらとは大きく異なるものであった。北部を東西に流れる道頓堀川の川沿いまではようやく都市化の波が及びつつあったが、その南には農耕地が広がり、そこは大阪市街地の住民に野菜を供給する畑作地帯として知られていた。西側を木津川が南流するのは今と同じであるが、それは大阪中心部に物資を運び込むための重要な水路で、まだ帆を上げた和船がひっきりなしに行き来していた。

このような歴史的、地理的条件が新田帯革の創業と発展にどのような影響を与えたのかが本稿の関心事である。

考察に際しては、2枚の地図を利用することにする。ひとつは、明治19年



図1 明治19年の創業地周辺
(2万分の1複製地形図を縮小して使用)



図2 現在の創業地周辺
(国土地理院発行2.5万分の1地形図 大阪西南部を縮小して使用)

(長次郎の創業の翌年に当たる) 参謀本部作成の2万分の1仮製地形図¹⁾のうち、難波村周辺を示したものである(図1)。まだ市街地化されない大阪市南部の様子がよく示されていて、これを参照することによって、創業地周辺の景観はだいたい推測がつく。もう一つは、国土地理院発行2.5万分の1地形図「大阪西南部」(2008年)である(図2)。図2からは、創業時期の景観を窺うことはほとんどできないが、図1で確認した関連施設や地名をできるだけそこに落とし込むことによって、それらが現代大阪の市街地の中でどのような位置関係にあるかを知ることができる。

1 創業地周辺の地理的環境

長次郎は、後年口述筆記された回顧録『回顧七十有七年』²⁾(以下、回顧録と略記することがある)のなかで、創業の場所について、「現在の(昭和10年時点)久保吉町事務所敷地」に借家を借りて仕事場としたこと、その地は、「鼬川及十三間川に沿ひて便利」なところであり、「西北部一面に池」があつて、後日拡張するにも都合がよかったこと、などを記している。この記述をてがかりに創業地周辺の状況を推測してみることにする。

^{いたち}鼬川というのは、図1-B地点にあった大蔵省の米倉庫(もとは難波御蔵とよばれた幕府の米蔵)あたりから西流して木津川の分流七瀬川にそそぐ小河川で、昔聖徳太子が四天王寺を建立した際、鼬が現れて資材の運搬に協力したのでこの名があると伝えられる。現在は埋め立てられてその流路は残っていないが、大蔵省の米倉庫の跡地が、近鉄難波駅に隣接する商業施設になっていること(図2-b地点)、JR大阪環状線の橋梁として鼬川橋梁の名が残っていること(図2-c地点)、さらに七瀬川の流れの名残りが円弧上にカーブする道路の形状として残っていること(図2-dの点線部)などから判断して、b、c地点とdの点線部をつないだ線が鼬川の旧流路とみることができよう(図2-cの点線部)。

一方十三間川は、木津川河口部東岸の津守新田を干拓するために開削した用

水路で、川幅が13間あったのでこの名がある。前記七瀬川と南の大和川をつないでいたが、上記のような開削事情を考えると、江戸時代以前はこの流路が海岸線であったと考えることができよう。現在は埋め立てられて、阪神高速15号線が旧流路の上を走っている（図2-e）。

工場の敷地はこの二つの小河川に沿っていたというのだから、両川の合流地点の周辺ということになるが、のちに工場が拡張された時代の写真などを参照すると、鼬川が事務所の南側を流れていることが確認できるので、結局創業の地は、図1-A地点に特定することができよう。これは現代の図2ではa地点に当たることになる。

因みに、長次郎が創業地の西北部にあったと記している「池」というのは、図1に見える材木置場町にのちに造成された貯木用の池のことであろう。この材木置場町というのは、もとは月正島^{がっしょうじま}と呼ばれていたところである。後述するように、江戸前期に河村瑞賢が淀川改修の一環として、木津川の流路をさへぎっていた難波島を掘り割って水路をつけた時、その水路の東側に残った島につけられた呼び名が月正島で、この島が何人かの大坂商人に材木置場として与えられたので、後に材木置場町とも呼ばれるようになった。明治19年測量の図1ではまだ水面はみられないが、大正12年測量の地形図では、半月型の月正島の南半分が水面となっているから、明治時代の後半に貯木用の池とするための工事が行われたのであろう。したがって長次郎の創業時には「池」はまだなかったはずであるが、明治時代後期の景観が創業時の景観として記憶されていたものと思われる。

この「池」はのちに埋め立てられて、新田帯革の拡大にともなって同社の工場敷地に取り込まれていく。同社の記録には、明治28年（1895）には十三間川を隔てた、当時木津川三丁目と呼ばれていた月正島の農地を借りてタンニン原料の樹皮倉庫、切断粉碎の場、社宅などを新設したと記されている。また明治30年には、十三間堀川（十三間川はこのような呼ばれることもあった）に私橋を架けて往来をしやすくし、この橋は「新工橋」と命名されたという³⁾。昭

和戦前期のものと思われる工場敷地図を見ると、月正島の部分にまで拡大した工場敷地のなかに細長い用水池が描かれていて、これがかつての「池」の名残りであろう。

長次郎の回顧録ではあまりふれられていないが、新田帯革の創業と発展に木津川が大きな役割を果たしたであろうことは想像に難くない。明治18年の創業の時点では、工場は木津川に面してはいないが、前記のように材木置場町（月正島）に敷地を拡大した時点で木津川に面することになった。昭和戦前期のものと思われる工場敷地図には、木津川に向かって「荷揚場」が設けられていることが記されている。新田帯革が木津川水運を利用したことは間違いないであろう。

その木津川は、陸上交通が発達するまでは、安治川とともに大阪中心部へ物資を運び込む際の大動脈の一つであった。安治川は、堂島川や土佐堀川へ入る船が利用し、木津川は道頓堀川や長堀川へ向かう船が利用した。両川が合流するあたりは河口かわぐちと呼ばれて、川湊としてにぎわった。そのにぎわいについて、



写真1 現在の木津川の流れ

江戸期の「摂津名所図会」は、「千石、二千石の^{おおふね}海船、水上に町小路を作りたる如くに、いとめざまし、さて、風威の順不順、潮時の満干を考へ、^{あした}朝に千艘の出帆あれば、夕に千艘の着船あり」と記している⁴⁾。江戸期における安治川や木津川水運の活況の様子をうかがい知ることができよう。このような状況は、明治前期にも続いていて、明治14年(1881)には、密集する船舶をさばくために、木津川西岸に船囲場が造成されている(図1-F)。

なお、木津川は、図1、2を見てもわかるように明治期から現在に至るまで、道頓堀川との合流地点からほぼまっすぐに南流しているが、これは、元禄12年(1699)に河村瑞賢が淀川改修の一環として、水路の障害となっていた、木津川の中州ともいうべき難波島を掘り割って水路を通した結果で、それまでの流路は難波島の東側では前記七瀬川、西側では船囲場の西端に当たる三軒家川を流れていた。つまりこのあたり一帯は、木津川河口近くの三角州に当たっていたのである。

以上、鼬川と十三間川に沿っていたという創業地の位置とその周辺の地形や歴史的背景について検討してきた。まだ市街地化の及ばない木津川沿いのお大阪南郊に敷地を確保し、社業の発展に伴って次第に周辺に拡張していく様子を窺うことができよう。因みに、現在大阪市南部の歓楽街として知られる新世界のシンボル通天閣が後に建てられる場所が図1のG地点である。もって、当時の周辺景観を推測する一助とすることができよう。

2 創業地周辺の企業と集落

新田帯革の発展にとっては、近隣の企業や集落との関係も重要である。そのような点で、新田帯革の成長に最も大きな影響を与えたのは、大阪紡績会社であろう。

その大阪紡績会社との関係について、長次郎自身は回顧録のなかで次のように述べている。

今序に同社の起原を記さむに、当時東西実業界に於て重鎮と云はれたる、東京の渋沢栄一氏、大阪の松本重太郎氏の發起にて紡績会社を起すこととなり、明治十五年現在の東洋紡績三軒家工場となれる敷地一部の地均に着手し、同十六年建物及び機械の建設を済まして運転を始められしものにして、会社の設立を見ると同時に作州津和野の人山辺丈夫氏を紡績技術修得のため英国に派遣し、同氏は紡績職工となりて二ヶ年間技術を修得し、紡績機械を英国に注文し、且英人技師ニュールド氏を雇入れて帰朝し、明治十六年より操業し始めし会社にして、余の久保吉町に工場を始めし凡そ二年前の創立にかかるものなり⁵⁾

ここに記されているように、大阪紡績会社は明治15年に設立され、翌16年から操業を開始したが、その創業の地は、当時西成郡三軒家（三軒屋とも）村といわれていた、図1中のH地点である（そのため地元では三軒家紡績とも呼ばれていた）。三軒家村は、木津川と道頓堀川の合流地点に近接していたこともあって早くから湊町として発展したところで、江戸期には、木津川口遠見番所や幕府の船蔵が置かれたりしていた。その三軒家村の南端に位置する工場敷地は、もと難波島と呼ばれていた木津川河口近くの三角州の一角で、その難波島を掘り切って南流する木津川に面している。

当然木津川水運を見込んでの立地であるが、その点で重要なのは、敷地の南に設けられている前記船囲場の存在である。この船囲場は、木津川を往来する船舶の増大に対応するために、かつて木津川の一部であった三軒家川を拡幅して入江状の川湊にしたもので、完成したのは、大阪紡績会社設立の前年に当たる明治14年のことであった。この船囲場を経由して燃料としての石炭や原料としての綿花が搬入され、製品が運び出されたことであろう。これからすると、大阪紡績会社が大阪南部の広大な敷地と木津川水運の利便性に依拠して立地したことは明瞭である。因みに船囲場はその後、役割を終えて順次埋め立てられていったが、現在もその一部が大正区三軒家東の地に残っている（図2－



写真2 もと船囲場の現況



写真3 大阪紡績会社跡地の碑

f 地点)。

大阪紡績会社は、日本の紡績業発展の牽引車となり、周辺に紡績・繊維会社が集積して大阪は東洋のマンチェスターと呼ばれるようになった。なお、同社は、大正3年(1914)に三重紡績と合併して東洋紡績となり(現在は東洋レーヨン)、工場の地も長次郎が記しているように同紡績三軒家工場となった。同工場の跡地は現在三軒家公園となっている(図2-h)。

さて、大阪紡績会社と新田帯革の商取引の始まりは、明治21年(1888)ごろだったらしい。前記回顧録の中で長次郎は、同年5月に開かれた西成郡品評会に出品した革製品が大阪紡績会社の技術者の目に留まり、それがきっかけとなって工業用ベルトの製造を始めたこと、それが同社によって高く評価され、他の紡績会社にも広く紹介され、販路を拡大していったこと、紡績会社の中には、新田帯革の製品を舶来品と間違えるようなところもあったこと、などを記している⁶⁾。

大阪紡績会社以外にも、新田帯革創業地の周辺には紡績会社がいくつか立地していた。創業地のすぐ北隣には摂津紡績が所在していた(図1-I 地点)。摂津紡績がこの地に創業したのは明治22年で、明治26年には、第二工場、同30年には第三工場を完成して大規模な操業を行っていた⁷⁾。明治45年に新田帯革が社地を拡張する際、摂津紡績とトラブルになり、その不誠実なやり方を非難する記述が回顧録に見える⁸⁾。因みに、新田帯革創業跡地(図2-a 地点)の北隣の現芦原公園のあたりが摂津紡績の跡地である(図2-i)。

津守新田の一角に当たる、木津川沿いの図1-J 地点にも、明治42年に津守紡績が開業した。現在の西成高校と西成公園の地である(図2-j)。これをみると大阪紡績会社同様、大阪南郊に比較的広く残された敷地と木津川水運の利便性に依拠して新田帯革の周辺に次々と紡績会社が立地していったことがわかる。

なお、摂津紡績は、大正7年(1918)に尼崎紡績と合併して大日本紡績会社となり、津守紡績ものちに同社と合併して大日本紡績津守工場となった。その

大日本紡績会社はその後ニチボーを経て現在のユニチカとなる。

企業ではないが、近隣に伝統的な皮革業の技術を伝える地域が存在していたことも新田帯革にとって重要な意味を持っていたのではないかと考えられる。それは、江戸期には渡辺村とよばれていた所で、行政的には木津村に属したが、役人村とよばれて、大坂の町奉行所のもとで司法警察の末端機構としての役割を背負わされていた。一方では斃牛馬処理の権利を得ていたことによって皮革業が発達し、西日本一帯から原皮を買い集め、革製品に加工して江戸などに販売し、いわば西日本における皮革流通センターとしての役割を果たしていた所である⁹⁾

長次郎は、若いころの皮革技術習得について、明治10年に本田（現在の西区本田）の藤田組製革所に入所して精励したこと、明治15年に幸町（現在の浪速区幸町）の大倉組製革所に入所したこと、大倉組在職中に、難波村（現在の浪速区難波、難波元町などを中心とした地域）にあった大阪製革会社へ「見習」に行って技術習得に努めたことなどを記すのみであるが¹⁰⁾ 近隣の地に蓄積された伝統的な革製品加工の技術や流通のあり方から長次郎が学んだことは多かったのではないだろうか¹¹⁾

お わ り に

のちの新田帯革の発展につながる明治18年の創業がどのような地理的条件のもとでなされたのかについて検討を加えてきた。それについては、まだ都市化の波が押し寄せる前の大阪南郊において木津川沿いの土地を確保して起業したことが重要であるといえる。そのことは、まだ陸上交通が未発達な当時において木津川水運を有効に利用できたこと、大消費地大阪近郊の有利さを確保しながら、社業発展にともなう社地拡大の余地を残していたことなどを意味している。

このような地理的条件の上に、明治18年という年が、同16年の大阪紡績会社の操業開始にみられるように、大阪における紡績ブームが始まる直前に当

たっていたという歴史的条件や、長次郎自身の類まれな企業家精神が重なり合って、明治40年代における新田帯革の目覚ましい発展が達成されたといえよう。

注

- 1) 『日本歴史地名大系 28 大阪府』平凡社、1986 年、所収図による。
- 2) 発行兼編輯人新田帯革製造所板東富夫、1935 年。
- 3) ニッタ株式会社編『ニッタ株式会社百年史』百年史編纂委員会、1985 年、28 頁。
- 4) 『摂津名所図会大成（巻之九上）』浪速叢書刊行会、1928 年。
- 5) 『回顧七十有七年』90 頁。
- 6) 『回顧七十有七年』87～92 頁。
- 7) ユニチカ社史編集委員会編『ユニチカ百年史』ユニチカ株式会社、1991 年。
- 8) 『回顧七十有七年』331 頁。
- 9) 『歴史地名大系 28 大阪府』『渡辺村』の項。
- 10) 『回顧七十有七年』38～62 頁。
- 11) 創業後の新田帯革と地元皮革業との関連については、吉村智博「西浜部落と皮革産業」（『近代大阪の部落と寄せ場－都市の周縁社会史－』明石書店、2012 年）に、新田帯革と地元住民の雇用関係については、川東埤弘「新田長次郎、校訓三実主義についての一考察」（『松山大学創立 90 周年記念論集』2013 年）に、それぞれ詳しい研究成果が示されている。

参 考 文 献

- 『日本歴史地名大系 28 大阪府』平凡社、1986 年
『角川日本地名大辞典 27 大阪府』角川書店、1983 年
『新修大阪市史第 10 巻』所収歴史地図、大阪市、2005 年
山口恵一郎ほか編『日本図誌大系 近畿 1』朝倉書店、1973 年

〔付記〕

本稿は、平成 23～24 年度愛媛大学・松山大学連携事業「愛媛県における近代産業資料の収集と分析」（実施責任者 鈴木茂）による成果の一部である。事業推進の過程で、川東教授からは多くのご教示を得た。記して謝意を表する次第である。